

CA1
EA947
B71
#36 June 1981
DOCS



特集・現代カナダの絵画と版画

1981年7月
No. 36


ISSN 0389-1852

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
SEP 1 1981
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE



トピックス	2
日本で初の現代カナダ絵画展	4
カナダにおける版画の発展と現況・ガストン・プチ	10
カナダ特派員日記⑤／急増する“カナチョン”族・橋田忠明	14
カナダ研究の潮流—政治学・デビッド・スミス	15
カナダ人の発明発見 (XI)	16
編集後記	16

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館

TOPICS

ランキン大使が離任 日加関係に大成果を残して

一九七六年三月に着任したブルース・A・ランキン大使が、六月十日、五年余の東京勤務を終えて帰任した。後任大使はまだ決まっていない。新大使が就任するまで、アーウィン公使が代理大使をつとめる。

ランキン大使は、東京離任とともに、通産省入りした一九四五年以来三十六年間の公務員生活にピリオドを打ち、インターナショナル・ニッケル社(通称INCO、本社トロント)の顧問兼役員に就任することになった。

ランキン大使の在任中に、日加関係は大きな発展を遂げた。まず日加経済合同委員会、日加科学技術協議、日加文化協議、日加経済人会議、外務省担当者間会議などを通じて両国間の協議がひんばんに行われるようになった。昨年の大平総理のカナダ訪問では、日加外相定期協議も合意された。

第二に、両国間の貿易額は、四十億ドルから七十億ドルへと飛躍的に増大した。カナダが十五年間にわたって年間一千万トンの石炭を日本に供給するという石炭商談が完結し、カナダ北極ボーフォ

ト海における石油・天然ガス開発への日本の資本参加に関する交渉がまとまり、さらに両国における銀行の相互支店開設が合意を見た。

第三に、学術交流や文化交流が盛んになった。筑波大学などにカナダ講座が設置され、カナダへの留学制度も定着した。日本におけるカナダ研究は、カナダ学会などを通じて、ますます充実しつつある。また、文化協定の締結や日加国交五十周年(一九七九年)を機に、スポーツや芸術の交流が活発になった。カナダを訪れる観光客の数も、年間九万人から約十六万人に増えた。

第四に、首脳同士の相互訪問が相次いだ。主なものだけでも、トルドー首相の訪日(一九七六)、クラーク首相の来日(一九七九)、大平首相の訪加(一九八〇)、鈴木首相の訪加(一九八一)、グレイ通産大臣の訪日(一九八〇)、



ランキン大使

田中通産大臣の訪加(一九八一)などがあげられる。また日加議員連盟が両国に設立され、議員同士の交流も活発である。

お知らせ

写真展 東京の丸の内線銀座駅と日比谷線日比谷駅の間の地下通路で、カナダの風物写真六〇余点と児童画約四十点が展示される。期間はカナダ建国記念日の七月一日から七月十日まで。サークルクラブ協会とカナダ大使館の共催。
留学 カナダ政府では、一九八二―三年度のカナダ公費留学生(対象は学士課程および博士課程修了者)を募集している。問い合わせは当大使館広報部学術交流担当渡辺まで。

憲法問題、七月以降に持ち越し 最高裁の審議長引く

六月はじめまでに一応の決着がつくものと予想されていたカナダの憲法改正・移管問題は、最高裁判所での審議が長引いたため六月十五日現在まだ結論が出ていない。政府の憲法案は、最高裁が審判を下したあと、下院で二日間最終的検討を加え、ただちに英国議会に送られてその承認を得ることになっていった。トルドー首相としては、建国記念日の七月一日までにはすべての手続きをすませて当日

新憲法を公布したい考えたが、それまでに間に合うかどうか予断を許さない。一方、連邦政府の憲法案に反対するケベック、アルバータなど八州の政府は、最高裁が合憲の判断を下した場合、直接英国議会に働きかける姿勢を見せている。

テリドンの米国進出に朗報 AT&Tが同一規格を採用

カナダが開発した文字図形情報システム「テリドン」に、本格的な米国市場進出の可能性が大きくなった。

テリドンは、すでに前号の本紙で述べたように、米国の首都ワシントンやロサンゼルスで現場実験用に採用され、大手出版・放送会社タイムが通信衛星を利用した情報サービスに用いることになっているが、今度は米国電話通信会社(略称AT&T、本社ニューヨーク)が同社の技術基準にテリドンが合致していることを発表、米国進出への期待が一挙に高まった。AT&Tの情報管理部長サミュエル・パークマン氏によると、テリドンは「そのままでも」同社の技術規格に適合する。英国の「プレステル」は適合せず、フランスの「アンティオーブ」は若干手を加えれば適合するという。これにより、文字図形情報システム(ビデオテックス)の規格は、北米とヨーロッパの二つにわかれる可能性もでてきた。

現在カナダではおよそ二十社がテリドン機器を製作し、あるいは関連サービスを提供しており、AT&Tの決定で業界は大きな躍進を期待している。フランシス・フォックス通信大臣も、カナダの技術にとって画期的なこととしてAT&Tの発表を歓迎、「カナダの業界が米国市場で相当のシェアを獲得するものと期待する」と述べている。

カナダでも生物工学の推進を 特別委員会が政府に勧告

連邦政府の特別委員会は、このほど、植物の新種開発や空中からの窒素採取、あるいは廃棄物の処理や再利用などを進めるため、カナダも生物工学の応用開発に積極的に取り組むべきだ、との勧告を行った。

生物工学の応用範囲は非常に広い。とくにカナダでは食糧やエネルギーに関係の用途が注目され、植物の新種開発などのほか、たとえばセルロースの新用途、鉱物のリッチング(溶出)などへの応用、それに医薬品の開発などが有望視されている。

同委員会は、生物工学の実用化へ向けて、政府の長期的な育成政策、人材養成、産業界の自主的な取り組み体制、研究の国際交流の必要性を強調、手はしめに開発計画実施のための全国組織を各界代表参加の下に設置するよう提案している。

鈴木総理がカナダ訪問 サミットなどで話し合う

五月九日、鈴木首相がカナダを訪れ、トルドー首相とオタワ・サミットの内容や日加間の自動車問題などについて話し合った。

席上、サミットについては、トルドー首相が最近の国際情勢を踏まえて、先進国間の危機管理体制の討議を提案したという。またカナダが自主規制を求めていた日本の対加自動車輸出問題に関しては、鈴木首相ができるだけ早い時期の解決を約束、さらに話し合いを継続することで見解が一致した。

(自動車問題については、日本政府が一九八一年度に対加輸出を六パーセント削減することに同意したことにより、一応の決着を見た。)

老年向けの夏期合宿講座 各地の大学に「エルターホステル」

定年を迎えた夫婦が、夏の間、大学の学生寮に合宿して地域の歴史などを勉強する、という「エルターホステル」が、カナダ各地の大学に広がっている。

「エルターホステル」とは、大学が夏休み中の教室と寮を一般に開放している短期講座で、六十才以上(およびその配偶者)なら、誰でも参加できる。期間は一週間、費用はきわめて安く、旅行と知的刺激と交友とで老後を豊かに過したい人々に喜ばれている。

昨年は参加大学一校、受講者数八十名だったが、今年は参加十校に千名以上が集まる見込み。

現在のところ、この運動は大西洋岸諸州が中心だが、オンタリオケベック両州でも実現の動きが見られる。また米、英、スウェーデンなどの外国にも広がっているところから、推進者の間では国際交流制度も検討されているという。

今年六・八月に「エルターホステル」の開催を予定している大学には次のようなものがある。かつこ内は講義内容の一例。ノバスコシア州セントアン大学(カナダ近代史、アカディア地方史他)、ニューファンドランド州メモリアル大学(州史、環境問題他)、ニュー・フランスウィック大学(家族史、大西洋岸地方のカナダ文学史他)、プリンス・エドワード島大学(同島の歴史と民話、島の生態学他)。

BC州に「ゴールド・ファイバー」

ブリティッシュ・コロンビア州の山々や谷に、今、金鉱を求める男たちのツルハシや削岩機の音が絶えない。ここ数年の金価格高騰によつて、新鉱脈の探査はもろろん閉鎖されていた旧鉱山の見直しもさかんになり、あたかも「ゴールド・ラッシュ」時代が再来したようだ。同州の金生産量は一昨年から六万六千四百オンス、昨年が二十三万三千六百オンスとほぼ横ばいだったが、生産額は一億四千万ドルから一億五千九百万ドルへと

五〇パーセントも増加した。

今年には新たに、BC州の二大金山といわれるスコッティ・ゴールド鉱山(サミット・レーク鉱区)とキャロリン鉱山(ラドナー・クリーク地方)が操業に入り、両社合計で年間十萬オンスの金を新規生産する。スコッティ・ゴールド鉱山はこの六月に作業開始、原鉱処理量は当面、日産二百トン、原石一トンにつき〇・六五オンスの金産出を想定している。

中小鉱山の動きも活発で、スター・デイ・バレーにあるベーカー山は、交通手段が空路だけという陸の孤島にもかかわらず、機械や要員を小型飛行機で送り込んでいるし、クイーン・シャーロット島のシノーラ鉱山は原鉱日産一萬トンの露天掘りを準備中。副産物として銀も各所で発見されている。

三十分で届く電送郵便 カナダ各地で利用可能に

文字や図形の郵便物なら、国内外を問わずわずか三十分で送れる、というカナダ自慢の電送郵便網が、最近、国内全域の主要都市で利用できるようになった。

「イルテルポスト」と呼ばれるこの郵便制度は、衛星中継によつて手紙や写真を各国へファクシミリ電送するもので、昨年からはカナダのトロントと外国諸都市(ロンドン、ニューヨーク、ワシントン、ベルン、アムステルダム)との間で即日配達の際際郵便として重宝

がられてきた。

従来このサービスは、カナダ郵政省とカナダの国際電公社テレグロフ・カナダとで行ってきた。最近これにCNCPTテレコミュニケーションズ社が加わり、テレグロフ・カナダの国際衛星通信網とCNCPTの国内マイクロ波網がリンクしたため、モントリオール、オタワ、ハリファックス、ウイニペグ、カルガリー、エドモントンの各都市からも、電送サービスが受けられるようになったもの。

また国際郵便だけでなく、国内郵便も電送できるようになったので、今後は国民一般の利用もふえると思われる。

この電送サービスでは、各都市の郵便局に置かれたファクシミリ送受信機に手紙を入れると、国内郵便はマイクロ波網を通じて国内各地の郵便局へ送られ、国際郵便はマイクロ波網でトロントへ送られた後、衛星通信網で海外の受信局へ送られる。

送る内容は印刷、タイプ、手書き文、図形、写真など、どんなものでもOK。一ページ分三百五十文字を二十五秒で送る。一ページの送料は国内宛で四ドル、外国宛で五ドル。「投函」してから三十分で宛て先に届く。

バンクーバーでも近くサービス開始の予定。

横田氏(日本鋼管)に表彰状

日本鋼管の横田久生会長(日加

経済人会議日本委員会会長)が、日加経済交流の増進に多大な功績があったとして、このほどトルドー首相から表彰状を授与された。日本人では、日清製油の坂口幸雄会長に次いで二人目。

トロント・NY間に特急列車

ニューヨーク・トロント間の特急列車運行が十年ぶりに再開され、この北米二大都市の間の旅がさらに便利になった。



四月末から始まったこの路線は、米国のアムトラック(全国鉄道旅客公社)とカナダのVIA Rail(カナダ鉄道)が共同で走らせるもので、ニューヨーク・ナイアガラ間はアムトラック乗務員が、ナイアガラ・トロント間はカナダ鉄道の乗務員が運行に当る。

料金は大人片道六十三米ドル(七十二カナダドル)。毎日一回、ニューヨークから午前八時四十五分(トロント到着午後八時三十分)、トロントから午前九時五分(ニューヨーク到着午後八時五十分)に出発する。

日本で初の現代カナダ絵画展

東京、札幌、大分で二十五人、作品八十九点を紹介

現代カナダを代表する画家たちの作品が、日本では初めて紹介されることになった。「二十世紀カナダ絵画展——大自然の律動」と題するこの展示会は、日加文化協定に基づき、カナダ国立美術館が準備し、朝日新聞社、東京国立近代美術館、文化庁、北海道立近代美術館、大分県立芸術会館、カナダ外務省などの後援・協力によって行うもので、七月から十一月にかけて東京、札幌、大分の各地で順次開催される。これを機会に、同展示会と先に開かれた「十人のカナダ版画展」の出品作を何点かカラーで紹介するとともに、現代カナダにおける絵画と版画の歴史や動向をお伝えしよう。

「二十世紀カナダ絵画展」の話が持ち上ったのは、日本の美術関係者たちがカナダを訪れた一九七七年。

最終的な展示品の選択は一九八〇年十一月に日本の美術館関係者と協議の上決定された。その規模は時代的には一九〇〇年以降現在までをふくみ、二十五人の作家による作品八十九点が展示される。そのなかにはカナダ美術の歴史をかざる大

家たち、トム・トムソン、エミリー・カー、L・L・フィッツジェラルド、アレックス・コルヴェイユ、ジャック・ブッシュ、ギド・モリナーリなどが紹介されている。展示品の約半数は国立美術館所蔵の名品であり、これに各地の公共機関のコレクションからも作品が加えられている。

一九〇〇年以降今日までというのがこの美術展のカバーする時代範囲であるが、そこにはカナダ美術の最初の国民流派の形成期がふくまれる。ジェームズ・モリス（一八六五—一九二四）、エミリー・カー（一八七二—一九四五）といった画家をはじめとして、この美術展の歴史部門ではやがて「グループ・オブ・セブン」、オートマティスト、「ペインターズ・イレブン」などのグループの形成につながっていきざまさまざまな地方の画家たちの活躍を追う。

カナダにおける最初の意識的な「現代美術」——ただ単に時代に遅れまいとしているだけでない——の発生は一九〇七年のカナダ美術クラブの結成に加わった作家たちの作品に見られる。彼らの多くは

海外に活躍の場を求めたが、カナダ国内で制作していた時からすでに情感による効果に力を入れる傾向が強く、従ってその作品は当時の世界の美術界の主流であ

った印象派の画風に近似している。数年後、J・E・H・マクドナルド（一八七三—一九三二）、ロー

レン・ハリス（一八八五—一九七〇）などの若手のグループが濃厚な風土感覚をもった作品に取り組みはじめた。後に「グループ・オブ・セブン」になる中核が第一次大戦前のこの時期に形成されたのである。

二〇年代半ばになると、このグループは北部原野のスケッチ小品によって知られるようになり、彼



ウィリアム・ロナルド「川」(1956年作)

らの描く風景画はカナダの多くの画家たちに強い影響をあたえるようになった。一九三〇年代には、「グループ・オブ・セ



アレクサンダー・コルヴィーユ「子供と犬」(1952年作)

ブンの活躍が誘因となって国立美術学校が発足した。「グループ・オブ・セブン」としてまとまった最後の展覧会は一九三一年であった。

「カナダ美術家団体」という絵画における現代的傾向を代表するより巨大なグループ

「二十世紀カナダ絵画展」の日程

●東京国立近代美術館

七月九日～八月二日

●北海道立近代美術館

八月二十九日～九月二十日

●大分県立芸術会館

十月一日～二十八日

なお、七月十一日(土)午後二時から、国立近代美術館の講堂でオンタリオ州立美術館カナダ美術史部長デニス・リード氏が「二十世紀のカナダ美術について講演する」となっている。入場は無料。

ループの第一回の展覧会は、一九三五年

に行われた。三〇年代終り頃のモントリオールでは、もう一つの組織「現代美術協会」が結成されていた。可能なかぎり

広範囲な基盤に立ってカナダの現代美術を推進してこうとする団体で、その原

動力となったのはジョン・ライマン(一八八六―一九六九)であった。パリで学んできたアルフレッド・ペラン(一九〇六

―)とポール・エミール・ボルドウア(一九〇五―一九六〇)もその中にいた。

四〇年代中頃にはボルドウアによって紹介されたシュレアリストの理論が、オートマティスムを生み出した。彼の後継者たちはこの名で呼ばれている。

ボルドウアの信念は、一切の束縛をは

なれた完全に自由で創造的な生き方を守りぬく、というものであり一九四八年の『一切の拒否』(Re-

fus Clôre)の公刊は基本的には彼の力によっている。この重

要な本の中で彼はケベックの知識人た

ちを抑圧し、自由な

考えを奪い、教会の

みが力を持つ植民地的

環境に封じこめて

いるさまざまな権力

について指摘した。

彼はこれらの代わり

に公的な権威からの

要求に対する拒絶を、

個性解放の理想の無

制限な追求を擁護した

のである。

トロント、モント

リオール一帯をのぞ

くと東部および西部

の美術界は、特定の

グループの動向と一

致する部分は少ない。

ニュー・ブランズウ

ィック州サックウイ

ルのマウント・アリソ

ン大学では、クリス

トファー・ブラット

(一九三三―)などの

プロフィール

エミリー・カー

一八七一年、B・C州ビクトリアで生まれ、そこで育った。サンフランシスコ芸術学院、ロンドン、セント・イブズ(英国)、パリなど各地で勉強を続けたあと、バンクーバーで教えながら絵を描いた。

一時は画家になるのをあきらめてビクトリアに戻ったが、オタワ、トロントを訪れ、そこで「グループ・オブ・セブン」のメンバーと会ってから、絵画に

意欲をもって取り組むようになった。一九四五年に亡くなるまでの二十年間は、絵画と文筆活動に専念した。

デビッド・アレグザンダー・コルヴィーユ

一九二〇年、トロント生まれ。子供時代をトロント、セント・キアサリンス(オンタリオ州)、アマ

リスト(ノバ・スコシア州)などで過ごしたあと、ニュー・ブランズウィック州サックビルにあるマウン

ト・アリソン大学で美術を学ぶ。一九四四年から二年間は従軍画家。一九四六から六三年までマウン

ト・アリソン大学で教鞭をとる。現在はノバ・スコシア州ウインザーに住んでいる。

ウィリアム・ロナルド

シェイクスピア劇で知られるオンタリオ州ストラットフォード生まれ。トロントのオンタリオ美術大

学で学ぶ。美術アーチストの仕事をする事から、創作活動を続ける。一九五四年から六五年までニューヨーク市に滞在。その後トロントに戻り、画家、テレビ・ラジオのパーソナリティーとして活躍。

ジェームズ・ウィルソン・モリス

一八六五年にモントリオールで生まれた。トロントで法律を勉強、のちパリに留学して、生涯をそこ

で過ごした。フランス各地だけでなく、英国、カナダ、西インド諸島、北アフリカに旅し、一九二四年にチュニスで亡くなった。

デビッド・ボルドウック

一九四五年トロントで生まれる。オンタリオ芸術大学、モントリオール美術館芸術デザイン科で

学び、その後はずっとトロントで暮らしている。一九六八年にカナダ国立美術館がパリの近代美術館

のために用意し、ローザンヌ、ローマ、ブラッセルなどでも開催された「今日のカナダ美術」展、第七

回カナダ絵画ビエンナーレ(一九六八年)、「一批評家が選んだ十四人のカナダ人」(ワシントンD・Cのハーシユホーン博物館主催、一九七七年)、「一九七〇年代におけるカナダ絵画の様相」(アルバータ州カルガリーのグレンボーン博物館主催、一九八〇年)などに出版した。

ライオネル・L・フィッツジェラルド

一八九〇年ウィニベックで生まれ、ウィニベックやニューヨークで学ぶ。一九二四年からウィニベック芸術学院で教え始め、一九二九年から四九年まで

は校長をつとめた。一九五六年、ウィニベックで死去。



エミリー・カー「海景色」

リアリストたちが、アレックス・コルヴィーユ(一九二〇)の作品に刺激を受け、その影響下に制作をしていた。西海岸ではエミリー・カーがフランスの影響をたつぷりしみこませた作品とともにバンクーバーへもどってきた。そこで彼女は田園風景を描き、インディアンの生活ぶりを描きはじめた。この仕事はずっと注目もされず評価もされなかったが、数年後「グループ・オブ・セパン」の仲間たちによって発見された。彼らはこれに夢中になり、さらにこの仕事を続けるようカーを激励したのである。

西部の平原地方では、マニトバ州ウィネペグで栄光の孤独のうちに制作を続け、たライオネル・フィッツジェラルド(一八九〇—一九五六)が、彼の死以前の時期にあっては唯一の重要な画家であるにすぎない。サスカチエワンのレジャイナにある当時州立大学によって維持されていた美術学校で、教師たちの一グループが集まり、ニューヨークの美術を西部の美術家たちに紹介す

ギド・モリナーリ

一九三三年モントリオールで生まれ、モントリオール美術博物館芸術デザイン科で学ぶ。一九五〇年代の中頃から作品を発表しだして、ニューヨーク近代美術館(一九六五年)、第三十四回ベニス・ビエンナーレなど、内外の美術展に数多く出品した。一九七六年にはカナダ国立美術館が大規模なモリナーリ回顧展を催し、昨年はオンタリオ美術館主催の「一九七〇年代における美術家十人展」に選ばれて、ヨーロッパ各地で紹介された。

トム・トムソン

一八七七年、オンタリオ州で生まれる。米国のシアトルで商業美術家をしていたが、のちトロントに移って独自の画風をうち立てた。カナダの風景画、特に「グループ・オブ・セパン」に大きな影響を及ぼした。一九一七年、アルゴンキン公園内のカヌー・レークで事故死した。

ローレン・S・ハリス

一八五五年、オンタリオ州生まれ。トロント大学、ベルリンで学ぶ。家が豊かだったため、その後はトロント、米国ニュー・ハンプシャー、ニュー・メキシコ、バンクーバーなどで創作に専念することができた。「グループ・オブ・セパン」創立者の一人。一九七〇年に死亡した。

ロイ・キヨオカ

一九二六年、サスカチエワ州で生まれ、アルバ

ータ州カルガリーで育つ。学業のあと、メキシコでジェームズ・ビントと一緒に創作。カルガリー、レジャイナ、バンクーバーなど各地で教師をしながら創作を続ける。バンクーバー在住。

ポール・エミール・ボルドウワ

一九〇五年、ケベック州で生まれる。巨匠オジラス・レデックの下で修業したのち、モントリオール美術学校などで学ぶ。モントリオールで絵を教えたが、一九四八年、ケベック社会の旧習温存的な構造を厳しく非難する本を発表したため、教師の資格をなく奪われた。その後、故郷のサンティレールやニューヨークに住み、一九六〇年パリで亡くなった。

その他の画家

- デビット・ミルン(一八八三—一九五三)
- アルフレッド・ペラン(一九〇六—)
- ジョン・ライマン(一八八六—一九六七)
- アーサー・F・マケイ(一九二六—)
- ジャック・W・ハンフリー(一九〇一—一九六七)
- ジャック・ブッシュ(一九〇七—一九七八)
- グレグ・カーノー(一九三六—)
- バタソン・ユーウェン(一九二五—)
- シャルル・ギャニオン(一九三四—)
- ロン・マーティン(一九四三—)
- マイケル・スノー(一九二九—)
- ジョイス・ウィーランド(一九三一—)
- シャーリー・ウィータサロ(一九四九—)
- ジャック・シャドボルト(一九〇九—)



ライオネル・フィッツジェラルド「ザ・プール」(1934年作)

る運動がはじまった。一九五五年、北部サスカチュワンのエンマ・レイクでのサーマー・スクールが二週間延長されて、職業画家たちのための研修会にあてられた。

一九五七年から六六年までの間にはニューヨーク在住の作家や批評家たち、たとえばバーネット・ニューマン、クレメント・グリーンバーグ、ケネス・ノーランド、ジュールズ・オリツキーといった人々がこの研修会にやってきた。一九五九年にははつきりしたグループとしての形をとった「レジヤイナ・ファイブ」がこの美術学校に生まれ出ている。

同じ頃トロントでは、ニューヨークのハンス・ホフマンのもとで学んだウィリアム・ロナルド(一九二六―)が、アブストラクトに関心を持つ若手作家たちの作品展覧会を企画した。この第一回の展覧会以後このグループは成長して、引き続き「ペインターズ・イレブン」の名称で展覧会をつづけた。ジャック・ブッシュ(一九〇九―一九七七)はこのグループの一員で、影響力も強く、今日でもトロントの若手の画家たちに多くの刺激を与えつつある。

時の経過を待たねば、今日のカナダ美術の特徴と動向を規定することはむづかしいが、過去十五年間をながめると、何人かの注目すべき一流作家が登場している。マイケル・スノー(一九二九―)は五〇年代に描きはじめ、やがて「ペインターズ・イレブン」に加入したが、近年は映画や写真の分野に力をそそいでおり、この分野では国際的に高い評価を受けて

いる。モントリオールではギド・モリナリー(一九三三―)が、五〇年代初期のオートマティストに対するリアクションとして誕生したブラステイションの理論をさらに推し進め、カナダ最高の洗練されたカラー・アブストラクトを完成させている。六〇年代半ばのオンタリオ州ロンドンではグレッグ・カーノー(一九三六―)らのビジュアル・アートの作者たちの活躍する中心地となった。一方国内最大の都市モントリオールとトロントは、今も変わらず芸術活動の中心地だし、東海岸ではハリファックスのノバ・スコシア美術工芸学校が若い芸術家たちに不断の影響力を持っている。西海岸をみると、一九六〇年代にバンクーバーはマルチ・メディアやビデオ・ワークの中心地となり、一方平原地方ではエンマ・レイクではじめて開花した豊かな感覚から生み出された個性的な画風が育ちつつある。

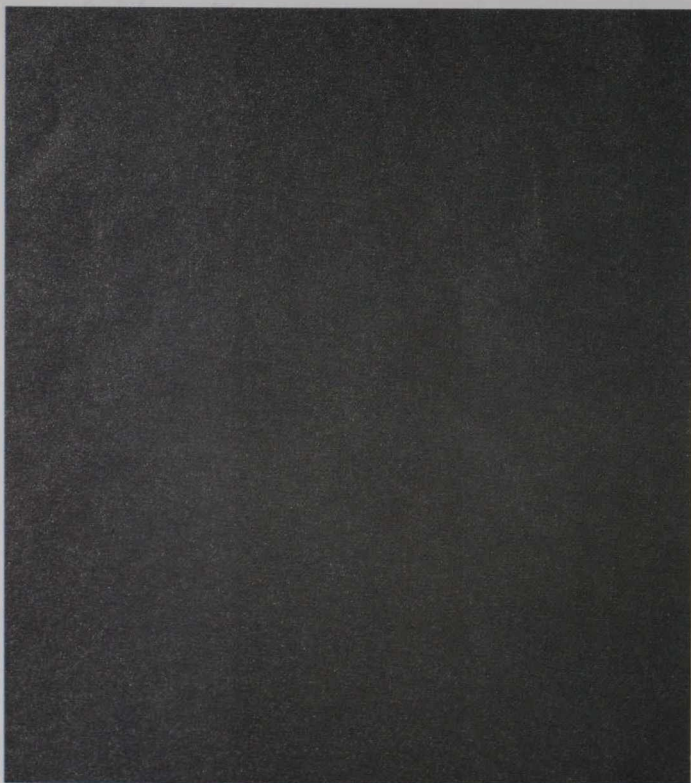
「二十世紀カナダ絵画展」はカナダ美術の傑作の数々を提供するとともに、この展示によって今世紀におけるカナダ美術の歴史を形作る主要な形式、流派に関する理解を深めてもらうことを目的としている。

スタッフとしては、オンタリオ州立美術館のカナダ美術史部長デニス・リードが今回の絵画展の歴史部門を担当し、カナダ国立美術館の現代美術部門副部長ジェシカ・ブラッドレーが最近十五年の最も今日的な部門を担当している。





ジェームズ・モリス「風景—トリニダード」



ギド・モリナーリ「青いトラペーズ」(1977年作)



デビッド・ボルドウック「おうむ」(1976年作)

カナダにおける版画の発展と現況

ガストン・プチ

今年の一月から六月末まで、日本在住のカナダ人版画家ガストン・プチ氏の努力でカナダの現代版画を集めた「十人のカナダ版画家展」が日本各地で開かれた。

この版画展は、写真製版によるシルクスクリーン、エッチング、リトグラフ、木版など、カナダ現代版画における多様な作品を紹介したもので、パートIIマルティン・ペイツ、エド・パートラム、ピエール・レオン・テトロといった気鋭の版画家が参加した。

カナダでは版画がきわめて盛んで、ほとんどすべての都市にワークショップができていくほど。日本との縁も深く、日本の版画展に出展する作家も増えている。以下はこの版画展に自らも出品したガストン・プチ氏による、カナダ版画の紹介である。

カナダにおいて版画は広く行きわたり親しまれている。最高級の用具をもつ多くの美術学校で版画が教えられ、東岸から西岸までワークショップがカナダ地図を賑わしている。事実、現代版画においてワークショップは肝要な役割を果たしてきたし、今なお果しつづつある。

カナダにおける版画の重要さは、あらゆるレベルの版画展が頻繁に開催されていることでも明らかである。カナダ版画・絵画審議会（プリント・アンド・ドローイング・カウンスル）は最近第二回ピエンナーレを主催したし、ケベック州では一九七八年、独自の版画審議会（コンセイエ・ド・ラ・グラヴェール）の設立に踏み切っている。いずれの審議会も、カナダ国境の彼方に活動範囲を拡張しようと計画し、将来は国際ピエンナーレをと案を練っている。版画コンクールは、国、州、地方の各レベルで開かれ、その数は数十を下らない。中でも最も人気があるのは、グラフィックス・ピエンナーレ、バーナビー・ピエンナーレ・プリント・ショー、オーパス・ワン等である。

これらに加え、商業ベースの版画ギャラリーも数多くあり、こうしたギャラリーも版画界で重要な位置を占めている。

一方、カナダの版画家は国際ピエンナーレに度々出品し、広く世界に紹介されている。

日本最後の「十人のカナダ版画家展」が七月三日から二十四日まで、東京新宿のフジテレビ・ギャラリーで開かれることになった。午前十時から午後六時までオープン。日曜日は休み。

版画の歴史

さて、挿し絵としての版画は、カナダ建国当時から存在していた。ケベック市の礎を築いたサミュエル・ド・シャンブレインが画いた絵は、彼の一連の旅行記「ヴワヤージ」を飾る挿し絵版画のインスピレーション源となった。同書は、シヤンブレインの生前、一六〇三年から一六三二年の間にフランスで出版された。事実、ニュー・ワールド（当時カナダはそう呼ばれたが）の絵画をもとに作られた多くの版画が十七世紀前半パリで出版され、パリ社会のエキゾティックな好奇心を満足させたし、当時の百科辞典編集者の貴重な民族的資料ともなった。これらの版画やその後カナダで作られた版

画は、私の知る限りでは単に挿し絵として制作された。

同様に今世紀初め、版画、とくに木版画の用途は広範多岐にわたり、安手の雑誌からバイブルに至るまで、あらゆる挿し絵に使用されていた。多くの人々にとって版画は、せいぜい美術の「貧しい親類」としか考えられず、美術の墮落した姿と酷評するものもあった。しかし、たとえこう言い切ってしまうとしても、この時代に生き、極めて真面目に版画技法を開拓した無名の作家達の存在を忘れてはならない。一九二〇年代にケベックのエコール・デ・ボザールでエッチングが教えられ、一九三〇年代にはリノニウム版画、木版画、シルクスクリーン、モノタイプも教課として加えられた。そして版画制作は紆余曲折の末カナダ芸術界で重要な位置を占めるようになるのだが、中でも一九三〇年代と、一層確実に地歩を固めた一九六〇年代以降が特筆に値する。

フィリップスとデュムーシエル

英国生れのW・J・フィリップスは、一九一四年はじめてウイニベックに入植、まずエッチングをシリル・パローに学んだ。しかしこの技法は、水彩画家としての彼の感受性には異質なものであった。間もなく雑誌の記事が縁となって木版画の世界に入るのだが、正式な訓練を受けたこともなく、ただその世界に誘われただけであった。あとはすべて独学。常に水彩画的色調を満えたフィリップスの版

画が持つオリジナリテイの秘密の一端はここにある。

一九二四年、フィリップスは十か月間英国に帰った。そこで彼は、Y・漆原という日本の版画家と知り合った。フィリップスは極めて多作の版画家で、四十年間に木口木版六十点以上、色刷り木版画百三十点以上を制作、すべて自刷りで時には百部以上刷り、その作品の多くは日本人の作品と比較され、好評を得ている。しかしこの比較は当を得ていない。モネ、ドガ、ホイットスラーの場合と違い、彼の作品に見られる日本の影響は、構図上の類似点よりむしろ技術面に多く見られるからである。漆原はフィリップスに日本の材料や技法を教えたが、それ以上の影響は与えなかった。淡く、霞んだ色調が一見同時期の日本の版画に似ていたに過ぎなかった。

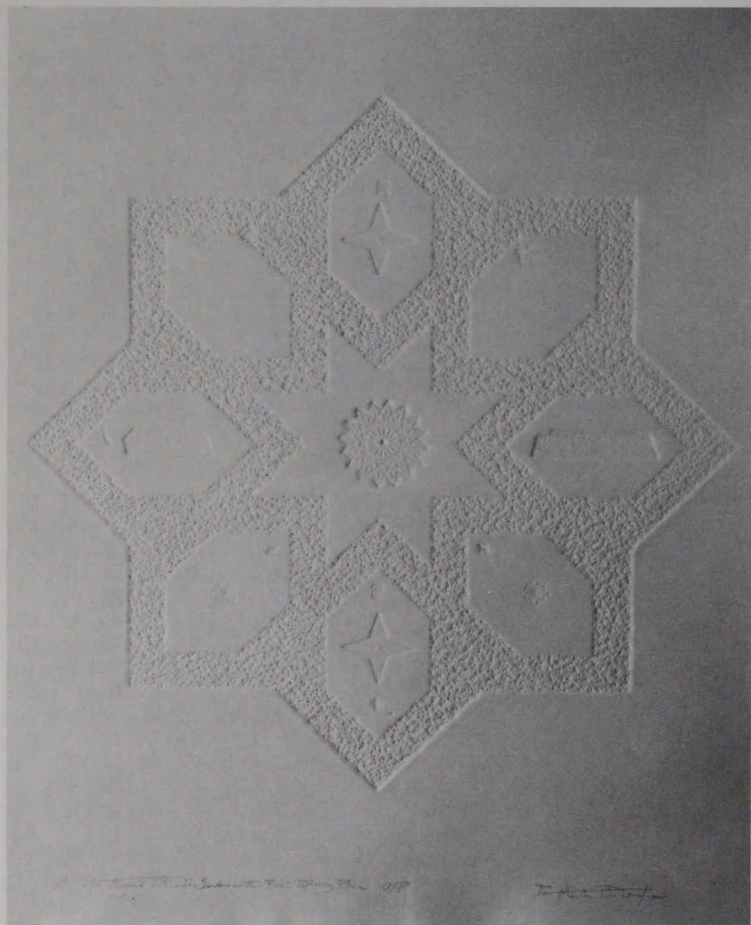
フィリップスの版画は、同時代の他の版画家の場合と同様、真の美を求めつつ個性豊かに表現された作品である。挿し絵の手だてとしての版画は、すでに過去のものとなっていた。

カナダ美術界で版画の第二開花期の幕を切って落したのは、まさにカナダ版画の父と仰がれているアルベール・デュムーシエルである。

フィリップスの場合と同様、デュムーシエルも版画の技術はロンドン出身のジエームス・ロウに手ほどきを受けただけである。が、この制作欲に燃える独学の版画家の双肩には、一九四二年、モントリオールの新しいグラフィック・アート・

スクールに美術科を新設するという大任がかかってくる。この異色の教師は、教科課程でもとくに「アート」の面に重点を置き、彼自身も版画制作の知識、実技両面の完成を目指した。パリでも、石版、銅版、木版と様々なワークショップで仕事をしており、彼の足跡を辿ることができ。デュムーシエルは、一九七一年に世を去るまで三十年にわたり教鞭をとり続けたが、その啓示に富む指導を受けた一群の版画家、刷師がモントリオールで頭角をあらわした。彼等は、今では先輩格として、カナダのこの地方の若手版画家達に影響を与える立場になっている。

名人デュムーシエルの情熱は程なく実を結んだ。すでに一九四九年には、デュムーシエルの弟子ローラン・ジゲールが設立したエディシオン・エルタから、トロンブレイ、デュムーシエル、ポードン、フェロン、ジゲール等、錚々たる作家の版画で飾られた豪華版十数点を出版している。その十年後には、エディシオン・ゴグレンが銅版画集をポートフォリオ形式で、またリチャード・ゴグレンがそれぞれ手画きの詩を彫り込んだ九枚の色刷石版画集「ピエール・ド・ソレイユ」を、同じくポートフォリオとして出版した。以上は、一九六〇年以前にもモン



パット・マルティン・ペイツ「A Star Beyond Stars for Gordes in the first Spinning place」
(エンボシング)

トリオールの版画界が、すでにある程度の成熟度に達していたことを示している。当時、欧州では同類の作品が定期的な世に問われていたとはいえ、カナダにおけるスタートとしては申し分ないものであった。

各地のワークショップ

ポートフォリオ出版の経験、版画制作に伴う複雑な技術、それに当然のこととして経済的要素などが重要な動機となつて、プロフェッショナルな版画家がグループ制作を指向するようになった。芸術家一般にとつて、とくにカナダ人気質にとつてかけがえのない個人主義に代わつてグループ制作、ワークショップ作りが始まった。

私の知る限りにおいて、カナダで最初の自由で開かれた版画のワークショップは、一九六三年リチャード・ラクローワの手による「アトリエ・リール・ド・リシエルシ・グラフィック」であった。十三年間に、このアトリエで仕事をした版画家の数は二百五十人を超えるが、技法も様々で銅版（ラクローワがバリの「アトリエ17」でヘイターから学び、モントリオールの版画家に伝えた）、石版、シルクスクリーン、凸版、モールドド・プラステイクス、その他ミックスド・メディア、キャンバス刷等であった。三年後の一九六六年、ラクローワは別個の団体としてラ・ギルド・グラフィックを加えたが、これはカナダの有能な版画家達の作

品を印刷、出版、配布する団体であった。ラ・ギルド・グラフィックは最初の十一年間に、五十五人以上の版画家による一千点以上の出版を成し遂げた。

一九六六年、モントリオールにも一つのアトリエ・ワークショップが、ピエール・アイヨットの手で誕生、「グラフ」と名づけられた。七人の美術家で構成する委員会が新しいメンバーの適格審査に当たったが、選ばれたメンバーは、古ビルを改装したこのワークショップの家庭的雰囲気浸りつつ毎日制作に没頭できる。モントリオールの新旧市街を散策してみると、「グラフ」からほんの数軒離れたところに、版画ワークショップがもう

一つあることに気付く。ポール・リュシエが経営する「アラシエル」で、一九七四年に出来た。一方、「アトリエ・ド・レアリザシオン・グラフィック」が、一九七二年ケベック・シテイで発足した。

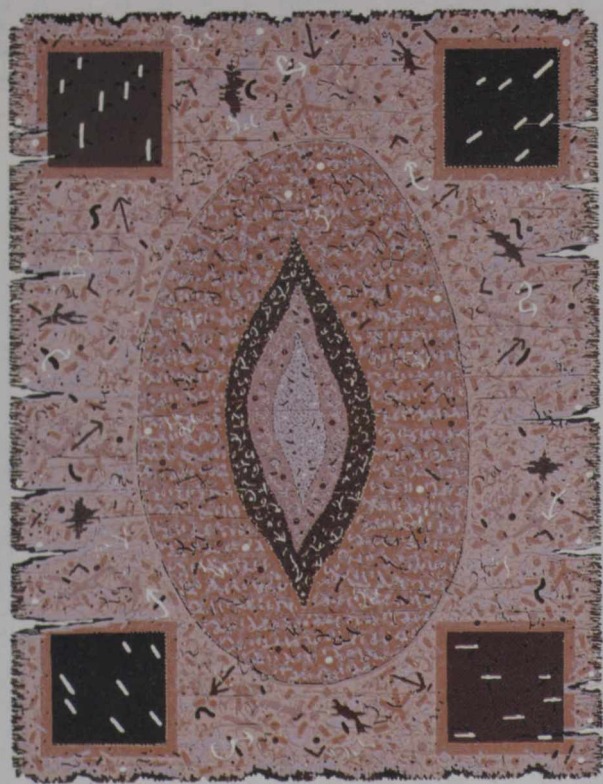
現代版画センターが、モントリオールなどに設立され、今では各地に多数存在している。一九六八年にビル・ロブチャクが、ウイニペッグに「グランド・ウエスタン・カナディアン・スクリーン・ショップ」を開き、やがて専門家で写真家であるレン・アントニーが加わった。かつて営利的手法の烙印が押されていたシルクスクリーンは、美術家の意図を忠実に反映させた作品を作ろうとする努力が

認められ、烙印も消された。一九七二年以来営利的な仕事はすべて中止、美術家による版画の限定版刊行に専念している。異なったメディアを組み合わせた制作実験のため、ワークショップの設備拡張を計画、またデーヴィッド・ウムホルツが、「マグニフィシャント・ムースヘッド・プレス」という、注文による石版印刷専門のワークショップを同じビルの地階に準備中と聞く。

版画のワークショップは、版画を刷る目的のためにのみ存在するわけではない。とくにウイニペッグのワークショップは、集会の場所であり、美術に関連した他の活動の出発点であり、また技術的アイデ

イアだけでなく政治的、社会学的アイディアの交差点であった。一般にC・A・Rと呼ばれるカナディアン・アーティスト・レプリゼンテーション運動の第一回会合がここで開かれて以来、このワークショップは、支持、権利、理解を呼びかけるアーティスト兼運動家の温床となっている大変有力な運動である。

もしワークショップが版画の活力を試すリトマス試験紙の役割を持つとすれば、カナダ随所にワークショップが出来たことは版画の健在を意味する。版画ワークショップやアトリエは、カナダにおける版画の発展のために大きな役割を果たしたが、プリント制作に適した



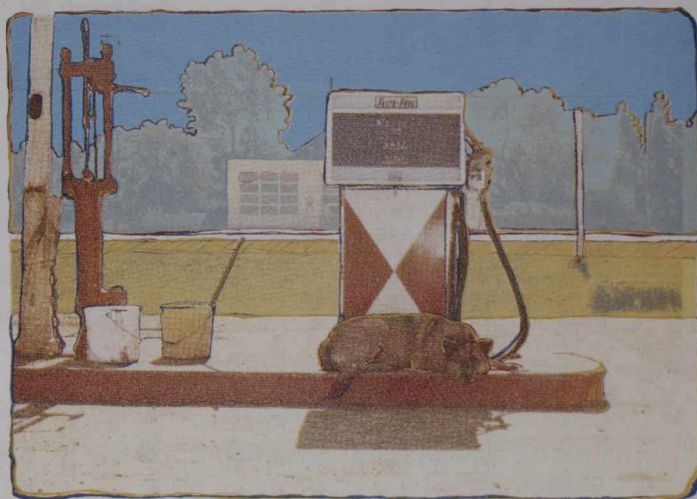
ピエール-レオン・チェトロ「écriture d'origine pour rituel cosmique」(木版, 1980年)



ガストン・ブチ「FIGUREMENT」(リトグラフ, 1977年)



ウェイーン・イーストコット「HAKONE 2」(シルクスクリーン, 1980年)



ウィリアム・ラブチャック「Neepava Noon II」(シルクスクリーン, 1979年)

仕事場は他にもある。例えば版画制作の共同ワークショップである。版画家グループが団結し、スタジオの空間や設備を共同使用するのだが、異なったニーズや制作姿勢に応えるため、一九七三年モントリオールで「グラフィア」が発足した。これは言わば共同体で、メンバーは平均十人前後である。グループを作る一番の理由は、空間や印刷機の共同使用という経済的利点であり、その他の共通項は、版画制作の各過程を自らの手で行うといったことぐらいしか見つからない。

美術学校の版画部も良き仕事場だ。アルバータ大学でワルター・ジュールの主宰する版画部の他、カルガリー大学、バンフ美術学校、ウインザー大学、バンクーバー美術学校等にある。こうした版画部と共に、自前で印刷機等の設備を揃える資力を持つ版画家達の個人スタジオも優秀で、多作の版画家が育つ格好の仕事場となっている。また、大半の版画家が学校に関係していることも、興味をひく事実である。

都市での美術活動から遠く離れた北極圏のイヌイット(エスキモー)の間で、革アププリケや象眼細工、象牙や石膏を使った彫刻などの伝統工芸を母体とした版画技術が台頭してきた。一九五八年の第一回版画展以来、イヌイットの版画を愛好する人々は増加の一途を辿っている。

はじめてイヌイットに版画を奨励した功労者は、ジェームズ・ヒューストンである。木版技法(北極圏では木材は皆無に等しく、磨いた石材を用いた)から始めて、次に乾燥したあざらし皮を代用したステンシル・カットへと進んだ。一九五八年にはケーブ・ドーセットの部落に、版画のワークショップを作るところにまで漕ぎつけた。イヌイットの版画家達が日本の伝統的版画制作技術から多くを学びとれるに違いないと確信したヒューストンは、一九五八年から五九年まで日本に滞在し、一時平塚運一に師事した。イヌイットの地に帰ってから、彼はケーブ・ドーセットの版画家達に技術面で

日本とカナダの外交関係はここ二、三年、新段階を迎えたと評している位、緊密さを増している。「遠い国」が急速に「近い国」になりつつある。そのため、政府でも企業でも、資源国カナダにこれまで以上の選り抜きの人材を投入し始めている。

それとともに、ちよつとしたカナダ悲話が生まれつつある。日本企業の進出の多いトロントや、モントリオール、バンクーバーなどで日本から単身赴任する「カナチオン」（カナダチオンガの略）が目立ってふえているのだ。ビジネスマンばかりではない。大学に留学する日本人先生や政府の駐在員の間にも「カナチオン」が少なくない。

例えばトロントのAさん。「それはわびしいのですよ。夕方帰宅しても誰も話し相手がない。読書やテレビ、ステレオでウイスキーをやりながら過ごすのですが、滞在が長くなるほどヤルセなさがつつてきます。妻子がいないので、カナダ人と交遊する家庭パーティすら開けません」と卒直に気持ちを打ち明ける。昼間、カナダの大都会で外車を飛ばすAさんの心の奥には、誰にもぶつけられないふんまんが沈澱している様子だ。

理由は言わずと知れた子弟教育の問題である。カナダの大都市では土曜日に集中授業する日本語補習校があり、父兄の要望を入れて年々充実してきている。だが、「カナチオン」の人達は共通して進学期の子供を持ち、日本の激烈な受験競争のもとではリスクをおかしてまでカナ

ダにつれてくるふんざりがつきかねるらしい。バンクーバーのBさんは「一度つれてきて暮してみたが、一週間に一回の授業で日本に追いつこうとする日本語学校の現状では、子供が帰国してから苦労すると判断して帰しました」と述べた。奥さんも子供さんもカナダの生活を楽しみ始め、友人も多くできかかっていたのに帰したのだという。

カナダ特派員日記⑤

急増する “カナチオン”族

橋田忠明

見方によれば、仕事だけでなく、家族がカナダの人達の間まじって数年間過ごすことは何にも代えがたい人生体験と言え。カナダの子供達と一語に英語やフランス語で遊び遊ぶことは、子供たちにとっても日本では得られない無形の財産を得ることになる。実際の生活を通じて自然に国際感覚を培うこともできる。

「カナチオン」諸氏もこの点を十分に知っている。それだけに日々の煩惱もつめるようである。

トロントのCさんは「要は親の側がどちらを選択するかの決断でしょう。でも、先輩のケースや知り合いの同じような立場の人達の話聞くにつけ、子供たちをつれてくる勇気がでませんでした」と語っている。「カナチオン」諸氏の最高の楽しみは、一、二年に一回の日本出張と、夏休みに家族がカナダを訪ねてきて再会できる時だ。Cさんは会社を代表し、カナダ人従業員も多く擁するバリバリのヤリ手だが、家族との再会の時に必ず涙が出てきて止まらないと苦笑した。

フランス語圏のケベック州となると、もっと深刻である。州政府は言語法を着々と具体化し、日本人の駐在員子弟にまでその嵐は押し寄せている。言語法では最低六年間は条件つきで英語学校に通わせることを認めているが、このところ運用が厳しくなり、なかなか当局の認可が降りないらしい。そのため、内緒に頼み込んでモグリで英語学校に通わせるケースもでてくるが、特別扱いされ、成績表もでないそうだ。州政府に陳情したり、一方で全日制日本語学校の設立を検討しているが、子期したようにははかどっていないのが実情。

モントリオールのDさんは「郷に入るとは郷に従え、という諺もあるように、ケベック州の言い分はよく分ります。フランス語学校に行くと、子供のことでしから、すぐにフランス語にも慣れるでし

よう。が、日本に帰ってから問題が生じます。英語学校に執着するのはそのためです」と言う。「子供の教育のことを考え出すと、仕事の方も落ち着いて進められません」とDさんはつけ加えた。

あるパーティーで、親しい駐在員の奥さんから「独身やつれが何かしら見えるわヨ」とそつと忠告されたカナチオン氏もいる。「完璧にやっている積りでも、心の悩みは表に出るものです」と同氏は嘆いている。

モントリオールでは有志からなる「カナチオン会」が生まれた、との話を聞いた。集まったら十数人、それでなくともしだいに減り始めているモントリオール駐在員で単身赴任がこなないもいたか、と驚く。一か月に一度集まり、お互いの独身生活の悩みや日本での教育問題など日頃の心のわだかまりをぶちまけ合っているとのことである。

最近、日本でも海外子弟の受け入れ態勢が除々に整いつつあるという。だが、私はカナダでの話からもっと主要な側面を心配する。「カナチオン」諸氏のカナダでの印象や日本との架け橋となる信念が崩れはしないか。カナダが家族第一主義の行きわたった国だけに、ことは深刻だとも言える。カナダ人の親友が、「カナダに暮す日本人の誰もが将来の日加交流を支える。外交官」だ」と言った。子弟問題でカナダ・ファンが一人でも減るとすると、それは両国にとつて座視できない事態だともみられるのだ。

(日本経済新聞トロント支局長)

カナダ研究の潮流—政治学

盛んな地域研究

デビッド・スミス

カナダ講座の担当教授として日本に滞在するこの機会に、カナダ社会に関する本の紹介を引き受けることになった。これから6回にわたり、社会科学のいろいろな分野をひとつずつ取り上げていきたい。スペースの制約があるので、各回ともごく限られた数の書物について簡略に述べることになろう。

まず私の専門である政治学から始めることにしよう。カナダの政治を理解するには、地域の動きに気を配らなければならない。このことは、Social Science Humanities Research Councilが発行したアルバータ州の社会信用運動に関するシリーズ十巻（創刊1950年）が示すように、以前からよく知られた事実である。

過去2、3年、研究者たちは、カナダの1部の社会学者がいうところの province-building（州建設）の原因と結果に取り組むようになり、しかも比較研究が中心になってきた。Richard SimeonとDavid Elkinsの*Small Worlds: Parties and Provinces in Canadian Political Life* (Methuen, 1980)とRoger Gibbinsの*Prairie Politics and Society: Regionalism in Decline* (Butterworths, 1980)がその好例である。前者は調査データに基づいて、連邦国家が州の住民に作り出す、ときには反発し合い、ときには補完し合う忠誠心について検討したものである。後者は平原諸州に焦点を当て、農業地域主義の古い基盤がくずれて、自己主張の強い州およびその政府がこれに代わっていると論じる。両者とも、州政治に関する旧来の見方に挑戦する興味深い仮説を提供している。

連邦制度やその運用についての本は、カナダほど著作の多いところはない。今日、ほとんどの本はカナダが存立するためには州にもっと権限分散をすべきだと論じている。これに対し、Garth Stevensonの*Unfulfilled Union: Canadian Federalism and National Unity* (Macmillan, 1979)は“時流に組みする”人々に彼らの選択を再考するよう迫る。カナダが直面する諸問題を取り扱った最近の著書としては、R.B. ByersとRobert Redford編*Canada Challenged: The Viability of Confederation* (Canadian Institute of International Relations, 1979)と、R. Kenneth CartyおよびW. Peter Ward編*Entering the Eighties: Canada in Crisis* (Oxford University Press, 1980)がある。前者にはカナダの連邦主義および政府の政策に関するすぐれた研究（例えば通信政策についての珍しい分析）および憲法論議に関する簡潔な分析が入っている。後者は一般向けにRamsey Cook, Donald Smiley, Denis Smith, H.V. Nellesといったカナダにおけるそうそうたる学者による8つの博識なエッセーから

なっている。

カナダの主要政党に関する新しい著書——George Perlinの*The Tory Syndrome* (McGill-Queens, 1980) および Joseph Wearingの*The L-Shaped Party: The Liberal Party of Canada, 1958-1980* (McGraw Hill-Ryerson, 1981)——は、小政党偏重だったこれまでの研究のアンバランスを正すことになろう。Perlin教授は、著書の中で、進歩保守党はなぜ自らの行動ゆえに永久野党の地位にとどまらざるを得ないかを説明する。Wearing教授はディーフェンベーカーによって大敗退をこうむった後の自由党の再帰を分析し、自由党がなぜ中央カナダではうまくいっているのに西部カナダでは人気がないのかを解明している。

主要政党が支持基盤を地域化したため、選挙制度の運用について懸念する声がでている。William Irvineの*Does Canada Need a New Electoral System?*と題する論文は、PRについての主な賛成および反対意見をとり上げて、PRのメリットに関する論議に油をそそいでいる。

政治家の伝記は、長い間、連邦政府の首相に関するものに限られていた。首相の伝記研究は現在も続いており、その多くはきわめてすぐれたものであるが、ようやくにして閣僚や州の指導者に焦点を当てた伝記も現われるようになった。最近出版された伝記として、キング政権およびサン・ローラン政権における強力な経済閣僚C.D.ハウに関するRobert BothwellとWilliam Kilbornによる第1級の研究*C.D. Howe* (McClelland and Stewart, 1979)とJohn Kendleによる1州首相についての注意深い研究*John Bracken* (University of Toronto Press, 1979)があげられる。Brackenは農民を基盤として政界入りしたのち、1940年代に進歩保守党の党首になった人物である。

最後に行政についてみると、カナダの政府はその政策の大半を執行するために、いろいろな規則やそういう規則を作る事務当局に大きく依存する。しかもカナダは連邦国家であるため、こうした政策執行には連邦政府と州政府の間に協力あるいは対立関係が生じる。また1970年代における経済引き締めのため、連邦および州政府にとって規則作りは比較的にな易く、しかもあまり金もかからなかった。G. Bruce Doern編*The Regulatory Process in Canada* (Macmillan, 1978)とRichard Schultz著*Federalism and the Regulatory Process* (Butterworths, 1979)は、これらの点について触れている。規制措置に関心のある人は、Institute for Research on Public Policyの出版物が参考になる。

（筑波大学客員教授）

編集後記

○読者の皆様にアンケートをお願いしましたところ、沢山の回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。詳しく検討して、ぜひ今後の誌面にいかしていきたいと思っております。アンケートの詳細は次号で報告します。

○カラーによる三度目の芸術特集をお送りします。今回は、現代カナダ絵画界および版画界の代表的な作品をご紹介します。カナダはまだまだ若い国ですが、いやそれだけに、芸術活動が盛んです。日本の絵画や版画とも対比させてご鑑賞下さい。絵画展もぜひご覧下さい。

○前号までご愛読をいただきました平野先生に代わって、カナダ講座担当の各員教授として在日中のデビッド・スミス教授に、いろいろな分野の本を通じてカナダ学界の潮流を紹介していただくことになりました。ご期待下さい。

○カナダにおける憲法問題の決着も、オタワ・サミットの開催も、残念ながら今号は間に合いません。新聞などでどうぞご注目下さい。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100 東京都港区赤坂七丁目三三-八

カナダ大使館広報部

早速これらの若木を自宅わきの畑に移植し、ひたすら実がつくのを待った。やがてその時が来た。一本の木からとれたり、リングは香りがよく、甘くて、水分が多く、しかもサクサクと歯ごたえもあり、一帯では最上のリングオだった。

このことを聞きつけた人々が、同じリングオを栽培したいと、各地からマツキントツシュさんのところにやってきました。ところが、不思議なことに、あるリングオの種からは同じ種類のリングオは生まれない。そこでマツキントツシュさんも、訪れた人々も、一本の木にできるリングオで満足しなければならなかった。

この問題は、ある日雇い人夫の知恵によって解決された。この人はつき木のことについて詳しく、マツキントツシュさんの息子アランにどうしたらつき木によって元のリングオの木と同じリングオができるかを手ほどきした。

やがて元のリングオの木の枝をもって農家から農家をめぐり、つき木のし方を教えるアランの姿があちこちで見られるようになる。こうして、オンタリオ中にリングオ園ができ、オンタリオ—そしてカナダ—はリングオの一大生産地へと発展したのである。

マツキントツシュ・リングオは、今日、ノバ・スコシア州のアナポリス平野からブリテイッシュ・コロンビア州のオカナガン平野に至るまで、全国各地で栽培されているが、すべてマツキントツシュさんが見つけたあの一本のリングオの木から広がったものである。

年の六月三日。一九七六年の中間調査に基づき予測では、カナダの人口は過去五年間に五・九パーセント増え、二千四百三十万余人に達しているという。また六〇年代の出生率低下を反映して、学齢期の子供(五—十四才)は一・二パーセント減った一方、二十五才から四十四才までの人口は一五・五パーセント、六十五才以上の人口は一五・三パーセントも増えているはず。州別で最も人口増加が著しいのはアルバータ州で、過去五年間に一四・九パーセント増えたものと予測されている。同じ予測によると、人口増加率が最も少ないのはケベック州の二・七パーセント。

●マツキントツシュ・リングオ

カナダが今日のような世界有数のリングオ生産国になったのは、マツキントツシュの名前で知られる紅色のリングオが開発されたおかげである。

一八一一年のある日、オンタリオ州ダングラスでいつものように開墾に働いていたジョン・マツキントツシュさんは、空き家跡の近くのやぶで何本かのリングオの若木を見つけた。当時、開拓地ではリングオは唯一の果物であった。リングオはそのまま食べることもできれば、乾燥させてパイやケーキ、プリン、ジャムにすることもでき、冬の間貯蔵することも、しばってサイターにすることもできたから、きわめて貴重な存在であった。

大喜びしたマツキントツシュさんは、

カナダ人の
発明発見 (XI)

●世界最初の国勢調査

国民の数を調べる、というのは昔から行われていた。しかしその目的は主に税金を課し、人民を治め、あるいは特定の人物を探し出すためのものであった。

今日的な国勢調査が初めて実施されたのはカナダにおいてであった。

一六六五年、フランス国王ルイ十四世は、植民地ニュー・フランス(ケベック)に初代地方長官としてジャン・タロンを派遣した。ニュー・フランスの再編成という命を受けていたタロンは、それに人口調査を利用することにし、初めて年齢、性別、婚姻の有無、職業などを調査項目に加えたのである。

一六六六年に行われたこの調査の対象になったのは、当時ニュー・フランスに住んでいたわずか三、二一五人に過ぎないが、その内容・方法が画期的だったために、その後各国で実施された国勢調査に大きな影響を与えた。

カナダ連邦の発足に当たった、いわゆる「連邦の父たち」がこうした国勢調査の意義を認めたのは言うまでもない。以来、カナダでは十年ごとに大規模な国勢調査が実施されている。

一番新しい国勢調査が行われたのは今